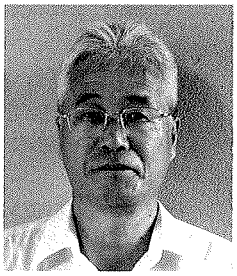

巻頭言

小さなエコとＩＰＭへの挑戦

(財) 日本植物調節剤研究協会　評議員
(社) 農林水産航空協会　常務理事　森田征士

境川の上流に位置するわが家では川を隔てて自宅が神奈川県，畑が東京都と県をまたいでいる。そもそも境川が蛇行していたのを河川改修で真直ぐにした関係で土地が入り乱れることとなったもので，一部の土地は川を隔てるため行政の手が入らず竹林と化している。それに畑が隣接しているため，蕗の薹，タケノコ，タラの芽，ミョウガ等が楽しめる都会の中の田舎暮らしをしている。

畑では野菜の栽培技術の向上と農薬の必要性等について自分なりに実証すべく精を出しており，特に栽培の時期，病害虫の発生動向，農薬の有効利用等を通じ小さなエコとＩＰＭ(総合的な病害虫や雑草の管理)を実践する方式で挑戦を続けて早くも10年になる。

夏野菜の栽培は，各種の害虫が発生するため基本的には幼苗期にあらかじめ浸透移行性の粒剤等を施用，それ以降は必要の都度発生状況をみて殺虫剤をスポット的に散布している。病害については，ひたすら被害葉の除去で対応するもなかなか苦しく，病班の急速な進展等からあきらめる場面も多い。オクラ，ミニトマト，ニガウリ等は防除をあまり行わなくてもそれなりの物は収穫できるが，なす，トマト，キュウリにいたっては幼苗期の防除は必須である。また，里芋は芽が出てまもなくはアブラムシ類，馬鈴薯はテントウムシダマシ類等の害虫に悩まされるが，その後はさつまいもやヤマノイモと同様放任の状態でまあまあの収穫が得られる。また，ヤマノイモは堀取りが大変であるが収穫時に土壌の深耕が同時にできるため毎年場所を変えて栽培し土壌の改良に務めている。また，特にナス科作物等の連作障害も大きな問題で輪作と共に畑を休ませる等回避に務めている。

冬野菜の中では，特に大根の播種時期の把握が難しく毎年の播種時期を記録して地域での適期を見極めることにしている。　平成13年から19年までの播種月日を見ると9／3，9／15，9／8，8／31，9／23，9／17，9／15と早い年と遅い年で前後25日間の差があるが，早く播種したときは害虫に食害され，遅いと成長が遅くなり概してどちらも不作となる。9月中旬が適期と考えられるが，早めに播種し直後に急に気温が低くなるような年は概して害虫の被害も少なく豊作となるようである。この気温の変化を捉えるのが難しいが近所の農家を見ると温暖化，気象変動を含めても驚くほど的確に時期を捉えている。

一方，夏の除草作業は今もって大変な作業であり，それから解放されようと河川敷の雑草を刈取り，敷草にして除草の手間と地表からの水分の蒸散を防ぎ将来の堆肥化に備えるというエコの推進を図っている。唯一の欠点は雑草の中には種子がすでに結実している場合があり，一面雑草の発芽で大変なことになることもある。

このように手持ちの技術を最大限取入れた方向で悪戦苦闘して得た結果は，土に柔らかさが増し土を耕すとミミズが沢山繁殖，それを追ってかモグラの来襲，これにはペットボトルの風車による振動で対抗，こうして少しずつではあるが野菜作りに適した土になってきているようである。万物を差別なく育ててくれる「土」の力を改めて感じるこの頃である。作物の栽培は，やはり，栽培し易い時期に，栽培し易い方法で栽培することが最も効率的であり，それがひいてはエコとＩＰＭに通じる道だと痛感しているところであるが，これは，そもそもは「ケチともったいない。」の精神から出ているのかも知れない。